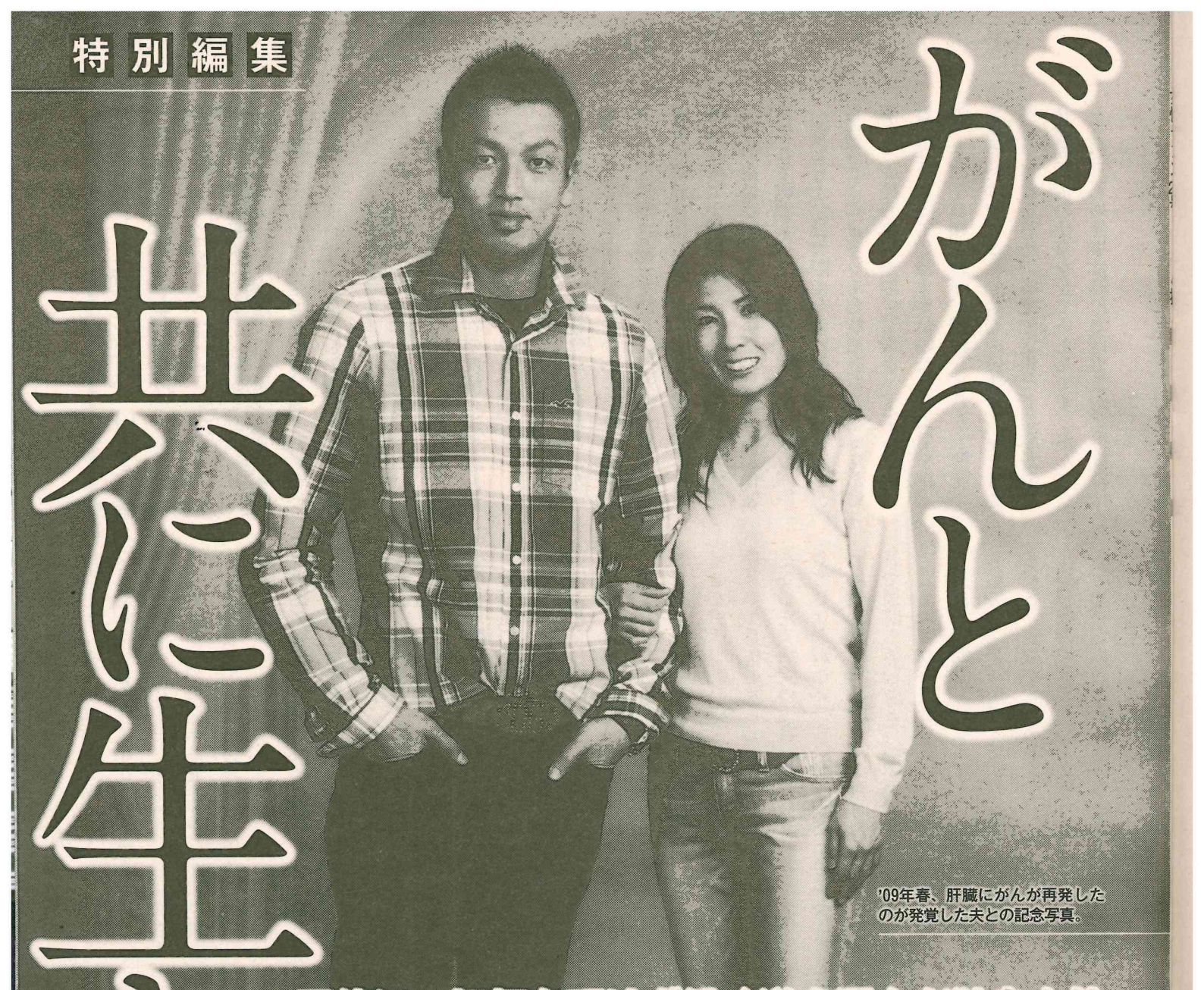
特別編集

がんと共に生きる



'09年春、肝臓にがんが再発したのが発覚した夫との記念写真。

同僚に一切打ち明けず働く道を選んだ独身女性、入院せずに在宅で闘う元介護福祉士――がんサバイバーとその家族5人の昨日今日明日。

年を重ねるにつれて、家族や親戚、友達ががんになったという話を聞く機会は増えていく。2人に1人が罹患する時代といわれて久しい。今回、取材したステージⅢの患者さんは本誌記者にこんなことを話してくれた。「私はがんと闘っているのではありません。がんと共に生きているんです」。抗がん剤の副作用の苦しみは想像を絶するものだし、お金はいくらあっても足りない。患者自身だけでなく、家族も精神的、体力的に大変だ。それでも、この特集であえて言いたいのは、がんという現実を受け入れて、希望を失わずに生きていこうということだ。ぜひ大切な人と読んでください――

家で楽しく過ごして、好きなお酒を友達と少し飲む。そんな暮らしで終わっていきたい

高橋みどりさん（仮名）66才

’51年、大阪生まれ。1児の母。28才で結婚して、32才で離婚。事務員として働きながら、女手ひとつで長男を育てる。60才で介護福祉士の資格を取得。’15年に大腸がんが発覚し、その翌年、腰骨に転移が見つかり、ステージⅣと診断される。ひとり暮らし。在宅医療の道を選んだ。

＊

3年前に大腸がんになって、1年半前に手術をしましたが腰骨などに転移していたことがわかって、また手術を受けました。麻酔から覚めると「もう腫瘍部分を取りようがなかった」と医者に言われました。がん細胞がまわりに散っていたんですね。それまではステージⅢと言われていたのですが、手術後からはステージⅣと言われています。

もともと私は大阪の生まれで、高校を出てからはスクールメイツで芸能活動をしていたんです。その後もラジオのアシスタントとかをちょこちょこやって、28才で結婚して、長男を産んで、その子が3才の時に離婚しました。簿記の資格を持っていたので事務の仕事なんかをしながら子育てをして、60才で定年になってからは、介護福祉士の仕事をしていたんです。がんになるまで、その仕事は続けていました。最後の仕事として、やってみようと思っていたんです。

がんに関する本は100冊以上読みました。読んでいるうちに、どんな本でも、それは他人の考えやから、自分とは違う。自分なりの生き方や病気との向き合い方があると思うようになったんです。

誰にでも死はやってくると思うようになりました。小さな子供が元気に遊んでいるのを見ても、いつしか死ぬんやなあというむなしさも感じます。誰しも生命が終わるときがある。そう気づいたときに、そこからどうやって逃れられるのか、答えがないと思うんです。

今、私の心が生きている空間と死の空間を行ったり来たりしているなら、居直るわけじゃないけれど、じたばたせず、生きている空間では少しでも明るくしていようと思うんです。

それでも、自分ががんになって働けず、ステージⅣという現実を完全には受け止めきれていません。

今年1月に退院して、入院から通院に切り替えました。病院の待合室で待っていると腰が痛くてしょうがない。食欲もなくなって、それまでは乗れていた自転車にも乗れなくなって、それで通院も無理やと、つい最近、6月5日に在宅医療に切り替えました。

毎日、訪問看護師のかたが来てくれて、先生も週に1、2回来てくださるんです。不安もあるけど、安心が先にあります。助かりますね。

今、家の中は、なんとか歩けるんです。前は痛さで眠られんときもあったけど、薬のせいか、ここ数日はゆっくり朝まで眠れています。うれしいですわ。

そやから、台所にも立って自分で料理を作りますし、トイレも掃除も洗濯も自分でやります。痛くて立てないときも、這ってでも自分でトイレに行きます。できる限り、自分のことは自分でやっていきたいと思っているんです。今のところはそのつもり。ようできんようになったら「助けて！」と言うようにしますわ。

でも、病院はいや。病院では死にたくない。同じ死ぬなら、ここ、家で死にたい。病院の壁やカーテンを思い出すだけでも嫌です。家で少しでも楽しく過ごしていれば、たまには昔から仲のいい友達も来てくれて話して笑えるし、少しは好きなお酒も飲める。そんな暮らしで終わっていきたい。そう思うようになりました。

19才の娘の成人式まで生きることが今の人生の目標

浅野恵美さん（仮名）48才

’68年、北海道生まれ。’90年に結婚、’98年に離婚、現在26才と19才の娘を持つシングルマザー。’11年にステージⅢの膵臓がんが発見され、手術するが、’12年に肝臓、’15年に肺と胸膜に転移し、摘出手術を。6年以上の抗がん剤治療が続いており、現在も胸膜に転移がんがある。娘2人は独立して、ひとり暮らし。

＊

北海道出身で、今も北海道で暮らしています。下の娘の成人式まで生きることを、1つの人生の目標にしています。

膵臓がんが見つかったのは’11年2月です。ある朝、突然お腹が痛くなって、救急車を呼びました。早朝だったし、痛みが治まればすぐに帰れると思っていたので、娘たちは起こさずに病院へ行ったのですが、検査をしたら膵臓に腫瘍が発見され、膵臓がんであることを告げられました。

そのまま入院となり、半月後には手術を控え、衝撃が走りました。娘とどんな会話をしたかも覚えていません。生きていられるのかなと不安になりました。

膵臓がんは、初期症状がほとんどないため、早期発見が難しいんです。そのため、進行している状態で見つかるケースが多いそうです。

先生に「生存期間どれくらい？」と聞いたら、「5年、10年の単位では考えないでください」と言われました。「1年1年の更新で考えましょう。それが5年にも10年にもなるから、頑張っていきましょう」と言われました。

子供たちのためにどうにかして生きなくてはと思いました。親は私しかいないので、この子たちから親を奪ってはならない。いなくなることはできないと思いました。

上の娘は毎日、病室に来てくれましたが、中1だった下の娘は、私の病気を受け入れられず、「お母さんが死んだら、自分が働かなくちゃいけない」という不安も抱えていたようです。1週間だけですが、登校拒否もしていました。2

在宅医の長尾和宏医師にキスしてはしゃぐ高橋さん。